

## ダッカ日本人学校

(在バングラデシュ日本大使館付属ダッカ日本人学校)

平成24～25年度ダッカ日本人学校派遣  
現 旭川市立永山南中学校 教諭 畠山 剛嗣

平成24・25年度の2年間、在外教育施設派遣教員としてダッカ日本人学校に勤務しました。私が赴任したバングラデシュは、世界最貧国で日本人が生活するには厳しい国であるといわれています。

今回は大きく分けて「風土と生活」「学校の様子」「危機管理」の3つの分野について報告します。

### 1. 風土と生活

#### (1) 地理・歴史

Bangladesh は「バングラディッシュ」でなく、「バングラデシュ」と読みます。バングラ=ベンガル(ボン族に由来)、デシュ=国、「ベンガルの国」という意味です。

日本との時差は3時間。直行便はありません。

インドとミャンマーの間に位置し、国土は日本の約4割(北海道の約2倍)、人口は約1億5千万人。世界で7番目に人口が多い国であり、都市国家を除くと世界で最も人口密度が高い国です。

1947年、ヒンドゥー教との宗教対立を背景に、イスラム教を国教とする東西パキスタンがインドから独立しました。しかし、東西に1,800キロも離れた国土、異なる言語、西に比べ東パキスタンには開発に力を入れなかったこと等から、わずか24年後、1971年に東パキスタンはバングラデシュとして分離独立を果たし、現在に至っています。



#### (2) 産業

この国の独立以来の最大の目標は、貧困の撲滅であると言われています。現在は外国からの援助に頼らざるを得ない状況です。

バングラデシュ経済の中心は農業で、最大の農業生産物は米です。主な工業製品は衣類、紅茶、タバコ、ジュート製品(ロープやレジ袋等に加工)などです。衣料品は輸出品の中心で、輸出総額の8割近くを占めています。

灌漑設備の不備に加え、電力不足、インフラ部門での未整備、例年のサイクロン・洪水による被害が甚大な為、産業が育つ素地が整っていません。

#### (3) 気候

バングラデシュの気候は、熱帯モンスーン気候に属し、年間降雨量は2,300mm程度です(ちなみに日本は1,800mm)。高温多雨多湿の時期が長いですが、現地の人に聞くと、6つの季節があると言っていました。

最も暑いのは4月で、連日40℃ぐらいに達します。自宅や学校などにはエアコンがありますが、一斉に使うためか、停電に悩まされる毎日となります。果物はライチ、マンゴー、ジャックフルーツが市場に出回ります。本格的な雨季が始まると、スコールも頻繁になります。川が氾濫し、道路には下水があふれ、衛生状態は最悪となります。9月に入ると再び猛暑が続きます。蚊も大量発生します。10月から2月までは雨が降りません。年末年始にかけて、やっと30℃を切る季節が訪れます。2週間ほど半袖短パンの出番がなくなります。ベンガル人たちはセーター・マフラーなどをまとい、最初は「おかげさだな」と思っていたのですが、最低気温が10℃を切ると凍死者が出ます。私自身も、毛穴が開いてしまったせいかストーブを買ってしまいました。



4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
暑季		雨季		夏		乾季		冬		春	



#### (4) 生活

入国した日、日本人学校のスクールバスで空港から住宅へ連れてきてもらいました。家賃が月10万円以上の契約だったので、どんな豪邸かと期待したのですが、お化け屋敷のような家です。びっくりしてしまいました。後で聞くと、当初決まっていた家は、直前に一方的に契約破棄とされたそうです。もっと高く払うという人が現れたためだそうです。約束はこの国では絶対的なものではないのだ、ということを知りました。その後、通勤可能な範囲で家探しをしたのですが、10万円以下の家賃で契約できる住宅は外国人居住区には皆無でした。聞くところによると外国人向けの住宅は高騰しており、ここ10年で一気に2倍の価格になったそうです。その割にはどの住宅も立てつけが悪く、窓からは蚊が入り放題だったり、ヤモリが笑い声のように鳴くのに怯えたり、ゴキブリの集会に立ち会ったり、と落ち着いて過ごすには程遠い環境だったと思います。

健康管理について述べると、まず第一に注意しておかなければならないのが水のことです。水は、飲むには適さなく、一部の地方ではヒ素が混入しています。現地人でさえ水道水は飲みません。浄水器は3年間で一番お世話になった機械です。4月は1日6回の停電に悩まされます。家の中で熱中症になるほどですので、水分補給は本当に大切なものです。また、インフラ整備が遅れており、水道管が清潔ではありません。においを取るために石灰を混ぜています。自分を含め身近な人の多くが結石を患ったのと無関係ではないような気がしました。

また、バングラデシュで暮らしと医療を考える時、頭に入れておかなければいけないのが雨季のことです。雨季はウイルスが活性化する時期で1年のうち最も病気になりやすい時期です。息子がインフルエンザらしきものに感染し入院。診察を受けても原因がわからないと言われてしまいました。健康管理は自己責任であると痛感しました。また、雨季には蚊はつき物というのは諸外国の感覚ですが、バングラの雨季には蚊はとても少ないです。それは、蚊の幼虫のボウフラが、あまりの雨の多さで流されてしまうからです。かえって10月末からの乾季に蚊が増えてくるのです。娘の原因不明の高熱もデング熱に感染したものだと言われました。2度目の感染からは

出血を伴うことが多く、大変危険なため、蚊の対策については神経を使うようになりました。

## (5) 現地で目にした光景

### ① 空港

空港に集まる人々は、家族や親戚・友人の出迎えと言われていますが、勝手に荷物を運んで後でお金を要求したり、荷物から目を離しているとなくなったりすること等があります。

### ② 交通事情

信号も警察も交通ルールもありません。信号無視や逆走は当たり前。他の車が通れなくなろうが、とにかく前に突っ込んでいきます。過積載も呆れるのを通り越し、もう笑いのねたになるほどです。リキシャとCNG、乗用車にトラック、野良犬、牛や象にヤギ、とどめは人です。当然路上では喧嘩が絶えません。

### ③ 買い物

バングラデシュでは通常、販売品に値段は表示されていません。基本的には交渉制です。慣れるまでは難しく、多く支払ってしまうことがよくありました。たいてい外国人には2倍の値段から交渉をスタートします。最近は、綺麗なスーパーマーケットも数件でき、値段の付いた商品を購入できるようになっています。ただし輸入ものは日本で買う時の3倍の値段と考えた方がいいです。日本の物はほとんど手に入りません。

### ④ 建築物

基本的にはレンガ造り。細い鉄骨を束にし、そこにセメントを流し込んで柱を立てます。木製の床面を竹で支え、コンクリートを流して床を作ります。壁はレンガを積んでいき、漆喰で仕上げを施します。建築基準では4階以上の建物は違法なのですが、増築、改築、階数など好き放題やっています。縫製工場が崩壊し、多くの方が圧死した事故が日本のニュースでも放送されたようです。ちなみに震度4が来ると崩壊する建物が多数あるそうです。



### ⑤ 娯楽

ダッカには、はっきりいって、観光したり遊んだりするところがほとんどありません。子供たちはお互いの家を行き来して家で遊ぶことが多いです。あるいは校庭です。運動不足が深刻な状況です。

## 2. 学校の様子

### (1) 概要

昭和50(1975)年開校。現校舎は現地企業の寄付により建設されました。グラウンドとプールがあります。体育館はありません。1階に幼稚部が併設されています。

### (2) 子ども達の登下校の様子

勉強道具のほかに、水筒、弁当を持参しバスで通学です。一部、バスを利用しない児童生徒もいましたが、その場合は保護者による送り迎えです。コンビニは存在せず、冷凍食品も日本人の口に合うものはほとんどありません。限られた食材での毎日の弁当作りは、保護者にとって悩みの種となっていました。



スクールバスについては、安全ルートの画策、運転手や添乗員の雇用管理等、様々な問題を抱えつつの運営でした。事故発生時は大使館領事部と連携し、子ども達が安全に避難できるようにしました。軽微な接触事故を含めると年に3回程度は事故が発生していました。

### (3) 学習の様子

保護者の英会話学習に対するニーズが高く、幼稚部から実施。ベンガル人の講師とTTで行っています。

週時程は、日曜日から木曜日が登校日で、金・土曜日が休業日です。これは、イスラム教の休息日に準じているためです。ハルタルといわれる暴動による休業を補い、時数を確保するため、週に1回は7時間目まで授業を行うのが基本形です。また、小中併置のため教科担任制に近い形になっています。

総合的な学習の時間は、現地理解を深めるためのダッカタイムとして行われています。現地インターナショナル校との交流、リキシャ調べ、チャドカン調べ、レンガ割り体験、渋滞調べ、川の汚染について調べるなどの学習が行われていました。

### (4) 保護者のかかわり

年3回の授業参観、懇談にはほぼ100%が出席。領事と直接話ができる機会があるとは思いませんでした。

学習発表会は大使も参観します。各クラスの発表をメインに、全校での英語劇や合唱・器楽を行いました。小学1年から中学3年まで幅広い年齢層の子どもたちを、まとめて発表させることには大変苦労しました。

運動会は本校の児童生徒数が少ないため、日本人会と合同で実施します。現地校に通う日本国籍児童生徒も参加します。日本式の運動会は世界一面白いのだそうです。

もちつき大会、おやじの会夏祭り(肝試し、屋台)、など多様なイベントがあり、いずれも日本で行われている伝統的な催しが根付いていました。



### (5) 児童生徒数の確保

民間企業の撤退が相次ぎ、児童数の減少が深刻になっていました。政府援助の基準である「派遣教員の子女と外国人の子女を除く在籍児童生徒数が30名以上」の条件を満たすため、様々な手を打ちました。

- ①日本国籍を持つ児童（いわゆるハーフ）・・・成育歴が個々人により異なるため、様々な問題が発生
- ②複式から単式授業へ・・・持ち時数が多い
- ③道徳教育、朝タイム、部活動、補習

- ④体験入学制度の実施・・・インター校在籍者にとっては長期休業期間にあたる
- ⑤英語・・・小1で週6回
- ⑥魅力ある学校行事の実施・・・体育館の問題，校外学習の下見の問題
- ⑦日本人会総会や日本人会報を通じた広報活動
- ⑧大使館と連携した請願の取組・・・派遣教員の確保と財政支援

以上のような取組をとおして児童生徒の確保と学校存続，派遣教員の定数維持に一丸となって努めました。

在籍園児児童生徒数(平成25年11月25日現在)

幼稚部			小学部						中学部		
年少	年中	年長	1年	2年	3年	4年	5年	6年	1年	2年	3年
7	4	5	5	3	5	3	1	2	2	7	0

### 3. 危機管理

大気汚染や水質汚染，デング熱等の伝染病の発生，比較的良いとされてきた治安の悪化に伴うゼネストや暴動，イスラム過激派による爆弾テロの頻発は，ダッカ日本人学校に学ぶ児童生徒の安全上の危機でした。

#### (1) 伝染病や自然災害 水質汚染等への対応について

ダッカでは日常的に，マラリア デング熱 腸チフス 狂犬病 ロタウイルス ニパウイルスなど多くの病気の発生が見られます。現地の衛生状態も劣悪で地下水のヒ素汚染や大気汚染も心配され，児童生徒の健康管理は大きな課題です。信頼できる医療機関がない状況下では国内のような適切で迅速な対応は難しいのが実態です。大使館の医務官のアドバイスを参考に可能な範囲での対応にならざるを得ません。

#### (2) ハルタル（ゼネラルストライキ）・オボロッド（道路封鎖）の状況と対応

平成15年，校庭に於いて殺傷能力のある爆発物が投入されて以来，外壁の強化，有刺鉄線，警察官監視塔（見張り台），警備員常駐小屋の設置，警察官の常駐警備要請，警備会社の変更（8名体制へ），危機管理マニュアルの作成とIDカードの携帯義務化の対策などが取られてきました。

そして平成25年，バングラデシュは独立戦争後最大の危機を迎えます。与党のアワミ政権とGNPやジャマティイスラムを中心とする野党との衝突が激しくなりました。任期終了間近の与党が野党の代表を大量摘発・逮捕したり，選挙管理委員会が全員与党で構成されたりしました。一方的な判決から処刑などもあり，三権分立もあったもんじゃないありません。両陣営がそれぞれに国民に蜂起を促して，戦車こそ登場しませんでした。毎日が内戦のような感じでした。忠告を行った諸外国の外務大臣は宿舎に火をつけられる始末でした。

国民は，ハルタルという形で参加します。ハルタルの時間帯は日の出から日没まで。政府機関，銀行，企業，商店，ガソリンスタンド等々，全て安全の為に閉じることになります。店を開けていると放火・略奪される可能性があるためです。「ハルタル」が宣言されると学校も臨時休校となることが多くなります。

#### (3) 日本人学校の対応

最も危険が予想されるのはスクールバスによる登下校です。本来は，現地スタッフの添乗員の

みでのバス運行とするところを、派遣教員が交代でバス添乗と無線担当として、早朝より対応しました。また、大使館は無線の傍受を行い緊急事態に備えました。

学校前で数万人規模の群衆が集まったり、数千人規模の集会が発生することも日常茶飯事になりました。ハルタルやオボロッドのピークは25年10月で、学校は臨時休校や緊急下校に度々追い込まれました。

臨時休校等については、児童の安全を最優先に学校運営委員長や大使館領事と協議して措置を決定します。現場の声を求められるケースも多く、連日、緊迫した雰囲気の中で職員会議が行われました。しかし、その判断に対して、保護者の意見は多様であり、「なぜ、これくらいの状況で休校にするのか。」「休みが多くて授業時数が足りるのか。」「危険な状況なのになぜ休校にしない。」「開校しても距離的に登校できないわが子はどうなる。」等の厳しい意見や不安を訴える声もありました。

そこで、臨時の保護者会等で学校の考え方や対応の基準を繰り返し説明することに努めた結果、後の学校評価では職員や学校の対応を労う意見を多く頂きました。

- |               |
|---------------|
| ①授業時数の確保      |
| ②家庭学習の指示      |
| ③行事の中止        |
| ④年5回の避難訓練     |
| ⑤スクールバスの添乗・護衛 |

#### 4. おわりに

バングラデシュの人たちは、一部の富裕層を除いて、ほとんどがまじめで、友好的でした。特徴的なのは、学ぶことや働くことが大好きだということです。マスコミを信じすぎていたのか、赴任前はイスラム圏には良い印象はなかったのですが、今ではそんなことはありません。

2年間海外で仕事や生活をしていて、「日本に帰りたい」、「日本だったらこんなことで苦労しないのに」という思いをもったり、日本が憧れの国家として見られていることや、日本人が好印象・尊敬される存在なのだということがわかり、日本を離れて日本の良さを再発見することができました。さらに言えば、北海道に関しても同じです。

日本に帰国した今、スマホをいじりまわしては大人に甘えている中学生と接していると、「日本人であることを誇りにして乗り切った2年間はなんだったのか」と落ち込んでしまう日が多いです。ダッカ日本人学校で得たかけがえのない経験を、日本、地元のために還元していかなければ、と感じています。